

研究代表者 所属・職：健康科学部・教授

氏 名：井上 倫恵

研究課題名：産後女性のプレゼンティーズムに関連する要因の究明

#### 研究の概要

産後女性における運動器機能不全の代表的なものとして腰部骨盤帯痛があげられ、産後における腰部骨盤帯痛は慢性的な症状に移行し得るだけでなく、産後うつや休職にも影響することが報告されている。一方、本邦ではこれらの関連について十分に明らかにされていない。そこで、本研究課題では本邦における産後 6 年未満の女性を対象に、腰部骨盤帯痛と産後うつ、プレゼンティーズム（欠勤することなく出勤しているものの、疾病等の健康問題により労働遂行能力が低下している状態）との関連について明らかにすることを目的とした。

研究デザインは横断研究、研究対象は産前産後の女性を対象としたイベントに参加した産後 6 年未満の女性 75 名であり、妊娠中の者や LPP のデータに欠損がある者は解析から除外した。主要評価項目は、腰痛疾患特異的質問票である Oswestry disability index (ODI)、エジンバラ産後うつ病質問票 (Edinburgh postnatal depression scale : EPDS)、プレゼンティーズム (single-item presenteeism question 東大 1 項目版 : SPQ)、副次評価指標は、腰部骨盤帯痛の疼痛強度 (numerical rating scale : NRS)、自覚的ストレス (perceived stress scale-10 : PSS-10) とした。これらのほか、対象者特性として、年齢、出産歴、身長、体重、疼痛部位、妊娠前および妊娠中の腰痛の既往について聴取した。疼痛強度が NRS で 3 以上のものを腰部骨盤帯痛あり、NRS で 3 未満のものを腰部骨盤帯痛なしと定義し、腰部骨盤帯痛の有無にて群間比較を実施した。また、指標間の相関関係について Spearman 順位相関係数を用いて解析を行った。統計解析には SPSS 28.0 を用い、有意水準は 5% とした。

#### 達成状況・成果内容

産後 6 年未満の女性 75 名（平均年齢 33.0 歳、産後経過月数の中央値 15.0 か月）のうち 31 名（41%）が NRS3 以上の腰部骨盤帯痛を有していた。腰部骨盤帯痛を有する産後女性では、腰部骨盤帯痛がないものと比較して、ODI スコア、EPDS の合計スコア、PSS-10 の合計スコアが有意に高く（それぞれ中央値 12.0 vs 0.0、 $P<0.001$  ; 6.5 vs 3.0、 $P=0.02$  ; 20.1 vs 15.9、 $P=0.01$ ）、妊娠前および妊娠中における腰痛の既往を有するものの割合が有意に高かった（ともに  $P<0.01$ ）。さらに、ODI と SPQ の間に有意な正の相関関係を認めた ( $\rho=0.34$ 、 $P<0.01$ )。

これらの結果から、産後 6 年未満の女性のうち約 4 割が腰部骨盤帯痛を有し、産後の腰部骨盤帯痛は日常生活への支障のみならず、産後うつや自覚的ストレスにも負の影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、腰部骨盤帯痛による日常生活への支障度が高いことは、産後女性におけるプレゼンティーズムとも有意に関連しており、本邦において解決すべき重要な問題であることが示唆された。